

生活者と共に取り組むエコイノベーション

Efforts toward Eco-innovation in Partnership with Consumers

巻頭言

“ファクター T” に期待する

Expectations on Factor T

近年、人間の活動に地球の環境を考慮することの必要性が高く認識されるようになってきました。特に、経済活動の維持と環境負荷の低減を両立させていくことが、大きな課題になっています。例えば、地球温暖化問題では、経済活動の指標である国内総生産(GDP)を二酸化炭素(CO₂)排出量と比較することがよく行われています。これは、同じ活動であれば環境負荷は少ないほうが良く、同じ環境負荷なら活動量が多いほど良いという考え方が基本になっています。これが“環境効率”の考え方です。現状の環境効率を基準年のそれと比較すると“ファクター”になります。この環境効率とファクターの考え方は、環境調和型製品を開発するための指標としても適用できるものと期待されています。

製品の環境効率では、製品の機能が同一であれば環境負荷が小さいほど好ましく、環境負荷が同一であれば機能が優れたものが好ましいと判断できます。概念は簡単ですが、この概念を実際の製品に適用しようとする、すぐに二つの問題に直面します。すなわち、多岐にわたる製品の機能のうちどれを取り上げるかということ、同じく多岐にわたる環境影響のどれを取り上げるかという問題です。また、できるものであれば、多くの機能の重要性を考慮して機能を合算できないかと誰でも思います。同様に、環境影響も重要性を考慮して合算できれば便利だと思います。

取り上げる機能とその重要性を決めること、並びに、取り上げる環境影響の種類とその重要性を決めることは、いずれも人々の判断、すなわち、主観的な価値観に基づいて行われます。したがって今までは、それぞれの企業が独自の方法を選択して製品の環境効率を計算してきました。また、研究の世界では、多くの一般の人々の主観的判断を統計的に処理し、人々の相違を客観的に表現する社会科学的手法が研究されています。

東芝は、数多い製品のそれぞれについて、機能と環境負荷を比較する“ファクター T”を設定しています。これを活用した製品開発への取組みが、日本及び世界を環境に調和した社会に導く原動力になるものと信じます。今後の更なる取組みに期待します。



稲葉 敦
INABA Atsushi